

「からだ」

クラーク記念国際高等学校 三年 菊池 萌珠実

北海道の暑さは盆までとよく言われるが、盆も過ぎたのに窓から入る日射しがまるで真夏のように暑い。

私は抱えて来た大きな鞆をベッドの上にドサッと下ろした。

眩しい程真っ白なシートにアイボリーのカーテン、カーテンの向こうからは小さな子供の泣き声や話し声も聞こえる。

ここは、大学病院の小児科病棟だ。

四年前にこの病棟に入院していた事が一瞬で鮮明に蘇り、懐かしさが込み上げてきた。

懐かしいなどと思えるのは、四年前の入院と違い気持ちに余裕があるからだろうか。

大きな鞆を開け、荷物を取り出そうとした時、視界にそれは飛び込んできた。

黄色い小さなテントウ虫だ。

真っ白なシートの上でテントウ虫の黄色がよく映えている。

テントウ虫が自分で飛び立ってはくれないかと、指でシートを叩くなどを試みたが一向に飛び立つ気配がない。

何とか飛び立ってはくれないかと、指でつつくとテントウ虫は何の抵抗も無くベッドの下にポトリと落ちた。

真っ白なシートで存在感を放っていたテントウ虫はすでに亡骸だったのだ。

拾い上げたテントウ虫は恐ろしい程軽く、先程までの存在感との差異に何か物悲しさを感じた。

あまりにも軽いその体は、テントウ虫の形をした、ただの空っぽの入れ物の様に思えた。

黄色いテントウ虫を摘み上げながら、ふとある話を思い出した。

体は魂を宿す為の入れ物であるという話だ。

その話を聞いた時は何だか馬鹿げた話だと思っていたが、それはあながち間違っていないのではないかと、一匹の小さなテントウ虫の亡骸を見つめながら考えていた。

せめて外へと出してあげたいと考えたが、病室の窓を開ける事は不可能で私が戸惑っている、入院の荷解きをしていた母が、ティッシュペーパーを差し出し、テントウ虫を包むように促してきた。

「可哀想だけど窓は開けられないから」

私は言われるがままテントウ虫をティッシュにのせた。

シートの上では映えて見えていた黄色は、同じ白のティッシュペーパーの上では何だかくすんで見えた気がした。

ティッシュに包まれたテントウ虫を母がそっごみ箱へと捨てるのをただじっと見つめながら、人の体もただの入れ物なのだろうかとぼんやりと考えていた。

入院してからの経過は非常に順調だったが、数日過ぎたある日、普段と異なる環境もあってか、ちよつとしたことで心が折れて感情的になってしまった。

それと連動するように微熱が続いたり、腹痛を起こしたりして、食欲も落ちた。

私の体は私の魂の声をしっかりと反映しているのだ。

確かに体は魂の入れ物かもしれない。ただそれは単純な入れ物ではない。自分の魂の声を目で見えるように表したり、感じ取る事を可能にしたりする為にその人だけに与えられた究極の入れ物だ。

与えられた魂を与えられた体で表現する事、それにより世界中に一人しか存在しない、一人の人間がそれぞれ形成されているだろう。

私という人間が存在しているのも、魂をこの与えられた体で体現できている故なのだ。私の入院生活は約一週間だった。

退院の日、外はとても晴れていて、見上げた空には力強く太陽が輝いていた。

輝く太陽を見上げて、私はふとあのテントウ虫を思い出した。

テントウ虫は、太陽に向かって飛ぶ習性から『天道虫』と名付けられたらしい。

あの小さなテントウ虫の亡骸は、あの日、私にとってはただの空っぽになった入れ物に過ぎなかった。

だが、テントウ虫にとってあの体は唯一無二の究極の入れ物だったのだ。

きっと、あの天道虫もこの大きな空を太陽に向かって力強く飛んでいたに違いない。

一週間ぶりに浴びた太陽の光を体いっぱい受け止めるように、私は天に向けて両腕を思いきり突き上げて、深呼吸をした。

私は太陽に向かって飛ぶ事は出来ないが、仰いだ空には、黄色天道虫のような太陽を掴めそうな程力強く感じる自分の手が見えている。

『生きている』という事を私の体は私らしく体現していた。

相変わらず、九月と思えぬ暑さは続いていたが、一週間前よりも高く高く見える空は秋の訪れを告げていた。